

株式会社 杉岡織布の 歴史



滋賀県北西部に位置する滋賀県高島地域は、江戸時代から「高島ちぢみ」と総称される「綿楊柳（めんようりゅう）」「綿クレープ」と呼ばれる薄手の衣料向け綿織物生地生産地として、その名を馳せてきました。「高島ちぢみ」は、古くから地域住民の生活に供されてきましたが、近代になり、主に紳士向けの「すててこ」「U首シャツ」「ランニングシャツ」向け生地として愛用され、現在では紳士向け・婦人向け問わず「パジャマ」「ホームウェア」、暮らしの中では「シーツ」や「敷きパッド」などの寝装寝具などにも利用されています。

株式会社杉岡織布は、商社から糸を買い、高島織物工業協同組合で整経（タテ糸を巻くこと）や高島晒協業組合で晒加工（生地を加工すること）し、必要な際は産地内の同業他社とも連携し、その「高島ちぢみ」を製織し続けてきた機屋（はたや）です。



昭和30年に創業し、昭和37年に有限会社として法人設立された杉岡織布は、綿織物産地である高島産地の機業としては後発の部類となります。創業者である初代代表者・杉岡定次（さだじ）は地域の一雇用者から一念発起して独立し、杉岡織布を立ち上げますが、昭和49年、59歳の若さで早逝します。

そして当時30歳の若さで後継した二代目の経営者が、現 代表取締役会長の杉岡敬司（たかし）となります。当時500軒を超える機屋がある中、杉岡織布の持ち味を模索しつつ、先代譲りの「正直・実直」を旨として、少しずつ織機台数を増やし、取引先との信頼関係を深めていきます。



現在わずか35軒といわれる数に至るまで機屋は激減し、周囲や会社を取り巻く背景は激変しましたが、今日まで事業を継続させることが出来たのは、偏に周りの方のお蔭だと感謝の念を抱きつつ、織布業に勤しんでおります。創業者が事業を始めた時の想いを受け継ぎつつ、三代目の経営者として、代表取締役社長杉岡定弘（さだひろ）が未来に向け、事業を継承すべく、経営活動に日々尽力しています。

